

西栈橋：西の栈橋の歴史

この栈橋の静かな佇まいは、一六〇〇年代初期から島民の生存のためにになった現実的な役割とは非常に対照的です。一六〇九年に九州の薩摩藩の侵略によって課せられた過酷な人頭税に直面した竹富島の農民は、貢納対象であった米作りのため西表島まで水田を耕しに行くことを余儀なくされました。人頭税は一九〇二年まで続き、この税によって地域の人々が味わった辛苦は今も偲ばれています。西栈橋は、二〇〇五年に国の登録有形文化財に指定されています。

竹富島の人々は、西栈橋から板舟（イタフニ）でゆっくり風を背に、アヨー、ユンタをうたいながら航海しました。その西栈橋は、米俵の豊かな荷揚げ場でした。

西栈橋周辺には、沢山の海の生き物が生息しています。浜辺にはイイダコが巣穴を作り、ミナミスナガニを捕えようと待ち構えています。また、島の代表的な大型肉食魚であるカスマアジは、浅瀬を素早く泳いで小魚の群れを追いかけます。夕方ともなると、沈む壮観な夕陽を待ちながら、栈橋に残る太陽のぬくもりに浸ります。太陽が沈むと、真っ暗な空に一面にちりばめられた銀河の星々と無数の星座が際立つ、人工の光に邪魔されないまばゆいばかりの夜景を楽しむことができます。